**旧澤原家住宅**

呉の歴史の中で、澤原家は大きな役割を果たしてきた。1886年（明治19年）、呉が海軍の大規模な駐屯地として選ばれた時、呉市を代表して海軍との交渉に当たったのが澤原為綱（1839～1923年）であった。この時、80年前に建てられた澤原邸の迎賓館が海軍総司令官の仮住まいとなった。その後、第二次世界大戦末期（1939年～1945年）の空襲を生き延びた呉でも数少ない大規模な建造物の一つとなった。澤原家は連合国軍と交渉して本館と三ツ蔵を残すことに成功したが、新蔵と近くの別宅は英連邦占領軍に接収されてしまった。両物件は1952年に沢原家に返還され、その後間もなく別宅は売却され取り壊された。一族は、2001年には正式に呉市に所有権を譲渡したが、居住権は保持している。旧澤原家住宅は2005年に呉市で唯一、帝国海軍に関係のない建物として、国の重要文化財に指定された。

邸宅の歴史は、澤原商家が居住を始めた1728年までさかのぼる。1740年の火災で屋敷の大部分が焼失しました。1805年には、翌年に広島藩主浅野右京(あさの・うきょう)が来訪するとのことで、宿泊所（本陣）が増設された。この頃になると、澤原家は酒造業で裕福になり、町内の庄屋の家やそれに類する名門が、貴人が町を訪れた際に接待するのが一般的であった。屋久島（現鹿児島県）の名木屋久杉や、広島の名所である厳島神社のアーチ橋や提灯を彫った欄間など、豪華な素材を使った客室は、澤原邸にふさわしいものであった。

澤原家には、貴賓専用の御成門も作られていた。 しかし、石京の来訪に備えて、官憲がこの門を見て、「商人としての立場を忘れている」と叱責した。その結果、一家は急いで門の長い装飾的な十字架を切り落とし、短くなった両端を木箱で覆って現在に至っている。

この事件は、江戸時代後半の商人の富裕化に伴い、貴族階級と商人階級の間で起こった権力交代を反映したものである。商人は豊かになったとはいえ、貴族よりも社会的地位が低く、貴族の家や生活のための贅沢は慎むことが求められていた。

1809年に建立された三ツ蔵は、2016年のアニメ映画「この世界の片隅に」で、通りに面した倉庫の側面が複数のシーンの背景として使用されるなど、呉のシンボルとなっている。三ツ蔵は、漆喰と藁を編んだものを重ねて作られた「藁のレインコート壁」（簔壁）で作られている。この技術は珍しく、歴史的建造物の中には現存するものはほとんどない。三ツ蔵は、通りから見ると一つの建物に見えるが、実際には三つの建物から構成されている。左右の建物は基本的に構造が似ているが、中央の倉庫は建築的な違いが見られる。例えば、側面の倉庫の窓は木製の格子窓であるのに対し、中央の窓は金属製の格子窓であり、大きさも異なっている。また、左右の建物は本瓦葺き屋根であるのに対し、中央の倉庫はS字型に湾曲した桟瓦葺き屋根である。近くにある新蔵は1905年に建てられたもので、澤原邸の中では最も近代的なものである。

三ツ蔵は、江戸時代後期の呉の歴史と発展を記録した澤原家の膨大な史料を保管していた。これらの史料は、1982年に呉市の有形文化財に指定され、現在は入船山記念館に保管されている。